

新体制の出版委員会とこれからの編集方針

森田 洋^{1,3)}, 池田四郎^{2,3)}

1) 北九州市立大学, 2) 株式会社ガステック, 3) 一般社団法人室内環境学会出版委員会

年3回の定期刊行

昨年12月の定時総会, その後に行われた第1回臨時理事会を経て, この度出版委員長の重任を仰せつかった北九州市立大学の森田洋です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。まずは前々委員長の川崎先生がご担当されていた2018年より続く, 年3号の定期刊行を遅滞なく果たすことを最重要使命と捉えて, 精進してまいりたいと考える次第です。また, 前委員長の徳村先生のご任期中には毎号特集が組まれるようになり, 学会誌の質・量ともにボリュームアップしました。出版委員の中で決めた特集担当委員が, 次号あるいは次々号でお届けする特集の内容を半年から1年かけて企画して準備し, 著者の先生方のご協力もあって毎号掲載することができて参りました。新任期間中にもぜひこの慣例と出版委員会のワークフローを崩さないよう, 学会員の皆様にさらにご満足いただける紙面づくりにつながる舵取りに尽力して参りたいと思います。

今後の編集方針

引き続き, 原稿区分としては原著論文, 短報, 総説, 解説, 技術資料, 調査資料, 用語解説, 室内環境学関連情報を基軸に論文募集, 編集をしてまいります。原著論文と短報については, 迅速かつ有効な査読プロセスにより質の高い論文をタイムリーに掲載して参ります。昨今, 短報の投稿が少ないことに対しては, 旧出版委員会でも課題意識が持たれておりました。12月の学会で修士課程や博士課程の学生会員が発表した内容が短報で投稿され, 年度内に掲載になるような体制強化を検討して参りたいと思います。総説, 解説につきましては引き続き特集をきっかけに, 会員あるいは会員外の専門家に執筆依頼をし, 読者の皆様にお役立ていただけるよう努めてまいります。用語解説については, 前号で掲載された原著論文あるいは短報に記載されたキーワードを中心に執筆を依頼し, 「室内環境」誌を辞書のように使っていただけるよう, 時流も意識してきめ細かく用語を選択してまいります。室内環境学関連情報は本誌の特徴の一つと言えます。会員に有益な室内環境学に関わる情報を正会員, 学生会員, シニア会員, 法人会員のみならずぜひご投稿ください。

また, 薫風(会員の声)や研究室紹介, 書評など人気のコーナーについても, 引き続き幅広く執筆依頼をさせていただきます。ただ, 依頼原稿のみに限定しているコーナーではありませんので, ぜひ会員としてのお声を原稿にしたためて随時出版委員会までご投稿ください。

近年の投稿状況

年3号化になって以降, 特筆すべきは投稿数の増加です。年2号発刊だった2008-2010年に比べ, 投稿数が概ね倍増しております(表1)。原稿が投稿されると, 出版委員会事務局にて投稿票に記載の内容や査読用原稿の体裁などがチェックされた後, 出版委員長に送られ, 任命された査読担当委員が査読者の選定や依頼を行い, その後査読プロセスがスタートします。投稿数が増えたことは学会としては喜ばしい限りではございますが, 同時に, 事務局や査読担当委員一人当たりが処理する業務量も増加傾向にあります。ここ数年で原著論文の査読期間が微増しており, 出版委員会の目標である「3か月以内」が達成できないことに懸念をしております。

そこでこの度, 「より省力化, 効率化できないか」, 「よりユーザビリティを高められないか」という観点で, 投稿原稿の査読プロセスを点検し, 投稿規程および投稿支援環境(学会HPへのテンプレート掲載, 投稿フォーム, 最終原稿提出フォーム)の整備を行いました。査読方針としては引き続き, リジェクトが目的ではなくどう修正したら受理できるかを提案する姿勢を大切に, 高い受理率を維持してまいります。

なお, 今回実施したこのような仕組みの整備だけでは十分でなく, やはり出版委員を担ってくださる先生方

のお力添えが無くては、継続的な学会誌の発行は困難となりますので、引き続き出版委員を引き受けて下さる先生方を募集しております。

表1 約10年前と直近3ヵ年の原稿投稿状況

年	投稿数	受理 (受理率)	不採用 (不採用率)	取下げ	その他 (査読中含)	原著論文の査読期間	
						平均(月)	最大(月)
2008	14	13 (93%)	1 (7%)	記録なし	記録なし	記録なし	記録なし
2009	10	10 (100%)	0	記録なし	記録なし	記録なし	記録なし
2010	15	14 (93%)	1 (7%)	記録なし	記録なし	記録なし	記録なし
2020	20	20 (100%)	0	0	0	2.3	3.8
2021	19	15 (80%)	2 (10%)	2 (10%)	0	3.9	6.9
2022	32	25 (78%)	4 (12%)	1 (3%)	2 (7%)	4.6	7.0

今回の投稿規程の改訂ポイント

本誌（26巻1号）より巻末に綴じられている投稿規程が更新されています。また既に学会HPの投稿規程も改訂されております。改訂のポイントについて、ウサギ委員長とクマ副委員長のトーク形式でお伝えいたします。

クマ：4年ぶりに「室内環境」の投稿規程が改訂されましたが、主にどのような点が変わったのですか？

ウサギ：今回の改訂では、①投稿数を引き続き増やすこと、②コンプライアンスの強化、③投稿プロセスと査読プロセスの効率化、④近年のトレンドへの対応、が焦点となっております。

クマ：一つ一つ具体的に伺ってもいいですか？①の投稿数を増やすためというのはどういうことですか？

ウサギ：年3号化するタイミングを起点として、出版委員会では「室内環境」誌の立ち位置とか、役割…、わかりやすく言えばどんな雑誌であれば生き残ることができるのかという議論をしてまいりました。研究業績という観点から言えば、新しい知見はインパクトファクターの高い国際誌に流れていきやすく、そのような流れに抗うのか否かとかそのような議論です。投稿数が減れば紙面の充実を図ることは難しく、まして現在の会員規模で年3号をどのように維持していくか、知恵を絞っておりました。

クマ：生き残る道…、重いテーマですね。どのような意見でまとまったのですか？

ウサギ：もちろん今後も引き続き議論を重ねていかなければならないテーマですが、現段階ではまず学生会員からの投稿を増やすこと、企業の研究者の方の投稿を増やすことに重点的に取り組んでいます。

クマ：どのようにして、そのセグメンテーションに至ったのですか？

ウサギ：学術大会での発表と学会での発表を比較してみました。すると、研究発表はされていますが、論文投稿には至っていない会員層があることが分かりました。一つは学生会員、もう一つは企業の研究者の方でした。学術大会での学生会員さんの発表を分析すると、学部4年生、修士課程の学生、博士課程の学生がよく発表されていますが、特に修士課程の学生さんが多いことに気づきました。指導教員の先生方にもヒアリングしたところ、修士の学生さんの業績で論文になっていないものは結構あると感じました。当学会所属の先生方のところにも、そのようにして眠っている知見、研究業績が一定数あると考え、これらを室内環境に投稿していただく流れを作りたいと考えました。

クマ：今回投稿規程の1.総則③が改訂され、「未発表の原稿に限る」に対する例外が明確に示されましたね？

ウサギ：はい。例外として明記することで、逆に投稿できる条件をお示しした形です。12月の学術大会で修士2年生が発表した演題が、大会でのディスカッションを通じて考察が加わり、書き上げられた修論の一部が卒業前に短報として室内環境に投稿されるという流れができたなら幸いです。

クマ：企業の研究者の方に向けてはいかがですか？

ウサギ：こちらはまだ今後の課題となります。2021年12月の京都での学術大会で行った出版委員会セミナーでも話題になりました。今後にご期待ください。

クマ：②のコンプライアンス強化というのはどういうことですか？

ウサギ：研究倫理に関わることがらについては、「科学の健全な発展のために」というキーワードで官民間問わず国際的にも重要視される渦中にあります。学会誌は学会の顔とも言われますので、コンプライアンス準拠については日頃より出版委員会で議論しております。ヒトを対象とした研究に関する研究倫理については過去の出版委員会で議論されて投稿規程や投稿票にすでに盛り込まれていましたが、今回はオーサーシップと利益相反について追記をいたしました。オーサーシップは投稿フォームに、利益相反については投稿規程と原稿作成用のテンプレートに盛り込まれておりますのでご一読ください。

クマ：③の投稿と査読プロセスの効率化については、どのような点がトピックですか？

ウサギ：今回は特に投稿される会員の皆様にとってのユーザビリティ強化に力を入れました。結局、「投稿しやすい=受け取りやすい」につながりますので、出版委員会側にもメリットがあります。投稿票を廃止して投稿フォームを新設するなど、新しい仕組みの導入を行いました。ただ、過去の方法をバツサリと切り取るのではなく、なぜその項目があったのかを入念に調査して、その理念や理由、在り方が失われないように配慮いたしました。原稿作成用のテンプレートについても丁寧に修正をしました。テンプレートに不備があることで、著者や査読者にさらにひと手間かけていただくようなことも少なからずありましたので、修正をいたしました。なお、なかなかバッチリなテンプレートを作り上げることは難しく、運用する中で気づく欠点もあります。テンプレートについては柔軟に修正していこうと思っておりますので、不備や使いにくさがあれば遠慮なく出版委員まで教えてください。また、過去に投稿した原稿をもとに執筆される場合もあるかもしれませんが、そこはどうぞ新しいテンプレートをお使いくださいますようお願い申し上げます。

クマ：個人的には④の近年のトレンド対応が結構気になっています。もしかして、引用文献の書き方とかですか？最近、電子ジャーナルが増えたりして、「ページ数がわからなくて書けない!!」なんてことがあり、気になっていました。あと、インターネットの記事を引用する際の書き方も指針がなかったので困ってました！

ウサギ：おっしゃる通りです。まさにそういった部分の修正を試みました。査読プロセスの中で、「引用文献の書き方を投稿規程通りにしてください」という査読コメントが出るのがよくあります。投稿規程やテンプレートをいつも整えておくことは大事だと思います。ただし、この点についても、今回の改訂で永久にOKというわけではありませんので、時代の変化には常に合わせていく姿勢で臨んでまいりたいと存じます。

クマ：色々教えて下さってありがとうございました。よーし、急いで投稿するぞ。さて冬眠して実験計画立てよう！

ウサギ：そこからですか^^お待ちしております！

謝辞

末筆ではございますが、これまで長きにわたって出版委員会を支えて来られ、この度ご退任された前委員長

の徳村雅弘先生をはじめ、小栗朋子先生、小沼ルミ先生、丸尾容子先生、萬羽郁子先生、山本政宏先生、出版委員会事務局を務めて下さった池田絢子様にご心より感謝の意を表します。

出版委員のご紹介

委員長 森田 洋：博士（農学）

専門分野（微生物制御学，食品工学，生物資源工学），所属学協会（日本防菌防黴学会，日本家政学会，日本食品工学会など）

副委員長 池田 四郎：博士（理学）

専門分野（微量分析学，環境毒性学，ガスセンシング），所属学協会（大気環境学会，日本産業衛生学会，ISIAQ, SETACなど）

委員 一條 佑介：博士（生活環境情報）

専門分野（環境工学，空気清浄），所属学協会（日本建築学会，空気調和・衛生工学会，日本臨床環境医学会など）

委員 川崎 たまみ：博士（理学）

専門分野（環境衛生学，公共鉄道の室内環境），所属学協会（日本産業衛生学会，日本建築学会）

委員 久我 一喜：博士（工学）

専門分野（建築環境工学，公衆衛生工学），所属学協会（日本建築学会）

委員 光崎 純：博士（工学）

専門分野（レギュラトリーサイエンス，リスク評価），所属学協会（大気環境学会）

委員 古田嶋 智子：博士（文化財）

専門分野（博物館環境学，保存科学），所属学協会（日本建築学会，文化財保存修復学会など）

委員 後藤 伴延：博士（工学）

専門分野（建築環境工学，居住環境設計学），所属学協会（日本建築学会，空気調和・衛生工学会，ISIAQなど）

委員 高木 麻衣：博士（環境学）

専門分野（曝露科学，環境化学），所属学協会（日本環境化学会，ISESなど）

委員 竹村 明久：博士（工学）

専門分野（建築環境工学），所属学協会（日本建築学会，日本官能評価学会，におい・かおり環境協会など）

委員 戸次 加奈江：博士（薬学）

専門分野（分析化学，衛生化学，環境毒性学），所属学協会（日本分析化学会，日本環境化学会，日本薬学会など）

事務局 古賀 遼：博士（学術）

専門分野（分析化学，環境化学），所属学協会（日本分析化学会，日本分光学会など）